

大学生における自己形成に関する研究 (Ⅲ)

— 日常的活動の遂行を妨げる葛藤内容の分析 —

山田 剛史

(神戸大学大学院総合人間科学研究科)

key words : 大学生, 自己形成, 葛藤

【問題と目的】

山田 (2003a) では, 大学生個人にとって重要とされる活動内容を抽出および分類し, それらを対象とした自己形成の規定要因尺度を作成し, 山田 (2003b) では, それらの諸活動を支える文脈の分類およびそれによる規定要因得点の相違について検討した。本研究では, 前者の研究の情報をもとに, 後者の研究を逆の視点, つまりそれらの活動の遂行を妨げる葛藤という視点から分析を行う。具体的には, 葛藤の有無について問い, 葛藤を有するものにはその内容を問い, その質的区分を行うこと, それらの分類パターンにもとづいて自己形成の規定要因の相違について検討すること, あわせて諸活動領域における葛藤パターンについて検討することを目的とする。

【方法】

(1) 調査内容: ①自由記述による重要活動の表出 (3 個) および最重要活動の選定 (1 個) ②①で選定した活動内容に伴う葛藤の有無に関する項目 (「はい」「いいえ」の 2 件法)。そして, 葛藤「有り」としたのものには自由記述によりその内容を問うた。③自己形成の規定要因尺度 (山田, 2003a)。(2) 調査対象: 近畿圏の大学生 141 名 (男性 52 名, 女性 89 名)。(3) 調査時期: 2002 年 7 月。

【結果と考察】

1. 葛藤内容の分類

まず, 葛藤「有り」としたものの葛藤内容を KJ 法により分類した。その結果, “葛藤はないとする” 「1. 無し群」に加え, “学業が他の活動遂行の妨げとなっている” 「2. 学業的葛藤群」(宿題やテストなどの学習活動/大学の授業など), “金銭や時間といった物質的なものが妨げとなっている” 「3. 物質的葛藤群」(時間の制約/お金/疲れから来る眠気など), “自身の内的な問題が妨げとなっている” 「4. 精神的葛藤群」(コンプレックス/それが本当にやりたいことか不安になる/何をすべきかなど, 将来に対する展望が確立していないなど), “上記の葛藤が複数にわたっている” 「5. 複合型葛藤群」(時間とお金。環境や大学の内容がベストではない/経済的な問題, 自分の精神的甘さ, 無意味な対人関係など) の 4 つが得られた。

2. 葛藤パターンによる自己形成の規定要因の相違

次に, 葛藤パターンにおける自己形成の規定要因の相違に関する検討を行うため, 葛藤パターン 5 群を独立変数, 自己形成の規定要因 (3 下位尺度の合計得点) を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ, 5%水準で主効果が得られた ($F_{(4,136)}=3.06, p<.05$)。

LSD 法による多重比較の結果 (Table1), 自らの活動遂行に際して時間やお金といった物質的な葛藤を伴うことを示した「3. 物質的葛藤群」は, 「2. 学業的葛藤群」および「4. 精神的葛藤群」に比して, また「1. 葛藤無し群」は「2. 学業的葛藤群」に比して, そうした葛藤を抱えながらもそこでの活動が高い自己形成的活動として認知されていることが示された。

これより, 物質的葛藤群の得点の高さは, その葛藤内容が個人の内的な問題というよりもむしろ個人の外側にある外的な問題であるため生じたものと考えられ, 学業的葛藤

群の得点の低さは, 大学生という自由な空間の中で学業以外の物事に関与し, そこでの活動に対して彼らなりの肯定的な意味づけがなされているものの, 大学はやはり学業を行うところであるという内的・外的要請 (認知) が働くため生じたものと考えられるが, 考察の域を出るものではないので, これらの点に関しては更なる検討を要する。

Table1 葛藤パターンにおける自己形成得点の相違 (N=141)

葛藤パターン	N=	自己形成得点	群間差 (LSD)
1. 葛藤無し	45	78.9(10.5)	1 > 2, 3 > 2・4
2. 学業的葛藤	12	70.5(13.8)	
3. 物質的葛藤	29	82.3(11.1)	
4. 精神的葛藤	28	74.7(12.1)	
5. 複合型葛藤	27	76.4(11.2)	

3. 諸活動領域における葛藤パターン

ここでは, 諸活動領域と葛藤パターンとの連関について, その人数の散らばりを以下のクロス表に示した (Table2)。葛藤無し群を除いた 4 パターンにおける相対比較によると, 「授業・講義」「アルバイト」では精神的葛藤が, 「自己研鑽」では複合型葛藤が, 「遊び・対人関係」「生活習慣」では物質的葛藤が, 「クラブ・サークル」では物質的葛藤と複合型葛藤が多くみられた。

Table2 諸活動領域における葛藤パターン

	葛藤パターン			
	学業的葛藤	物質的葛藤	精神的葛藤	複合型葛藤
授業・講義(21)	2(9.5)	7(33.4)	8(38.1)	4(19.0)
クラブ・サークル(23)	5(21.8)	7(30.4)	4(17.4)	7(30.4)
アルバイト(2)	0(0)	0(0)	2(100.0)	0(0)
自己研鑽(26)	1(3.8)	6(23.1)	8(30.8)	11(42.3)
遊び・対人関係(16)	2(12.5)	6(37.5)	5(31.3)	3(18.7)
生活習慣(8)	2(25.0)	3(37.5)	1(12.5)	2(25.0)

注) カッコ内は諸活動領域における葛藤パターンの出現率 (%) を示している。

【本研究の意義】

本研究では, 山田 (2003b) の活動を支える文脈とは全く逆の葛藤という視点からの検討を行った。山田 (2003a) では重要な活動内容を 1 つに選定させているが, 大学生の日常を考えると, 単一の活動 (それがいくらか重要なことであっても) のみを遂行できるほど単純ではないことは想像に難くない。そして, 葛藤を有り/無しの単純な 2 分法ではなく, その葛藤内容 (パターン) にまで踏み込んで検討することにより, 大学生の抱える内的・外的問題についての具体的な提言が可能になると思われる。

【引用文献】

山田剛史 2003a 大学生における自己形成に関する研究 (I) — 全体性から抽出された活動内容と認知的評価およびその文脈からの検討 — 日本発達心理学会第 14 回大会発表論文集, 46.

山田剛史 2003b 大学生における自己形成に関する研究 (II) — 諸活動領域を支える文脈の質的区分 — 日本教育心理学会第 45 回総会発表論文集

(YAMADA Tsuyoshi)